

自己理解を促すかわり方を考える

教師の共感的なかわりの中で、
生徒は自身の思いを再構築する

富山大学保健管理センター 客員准教授 西村優紀美

「マイ・ストーリー」を生徒自身が語れるようになるためには、教師の日々のかかわりが重要になる。では、どのようなことに留意して、生徒とかわればよいのか。「共感的な対話」をキーに専門家が語った。

1
日常の
接し方

【西村客員准教授からの提言】よりよい生き方・進路を自分で選択するためには、過去の経験を踏まえて、自分の考え方や得意・不得意に向き合う自己理解が欠かせませんが、自分に対して肯定的でなければ、自分を理解しようという気持ちにはなりません。そこで、生徒の自尊心を高めるための有効な手法の1つである「共感的な対話」について紹介します。進路を考える生徒の支援にきつと役に立つと思います。

教師を「対話の対象」と
生徒に認識させる

生徒が自尊心を育み、自己理解を深めていくための対話においては、自分の思いや考えを他者に共有する中



富山大学
保健管理センター
客員准教授
西村優紀美
にしむら・ゆきみ

専門は発達障害児・者に対する「コミュニケーション支援」。一般社団法人全国高等教育障害学生支援協議会理事などを歴任。現在は、石川県立高校スクールカウンセラー、石川県生徒指導・発達障害サポートチーム委員などを務める。

で、「自分のことを分かってもらえた」「そう思ってたよんだ」といった気持ちになるよう、他者の共感が重要で、そうした生徒との共感的な対話が成り立つためには、まずは生徒に教師のことを「対話の対象」として認識してもらわなければなりません。だからこそ、教師は口頭から生徒に声をかけて、日々の出来事や生徒が考えていることを興味を持って聞き、共感する態度を見せる必要があります。

生徒にかける言葉は、「最近、何か元気そうだね!」「部活動の調子はどうなの?」「文化祭の準備は、はかどっている?」など、何気ないひと言で構いません。それに対する生徒の返事を「そうなんだ」「それはいいね」などと肯定的な言葉で受け止め、生徒が話す内容に興味を持っていることを示します。

「へー、○○なんだ」などと生徒が言った内容を繰り返すことも、「ちゃんと聞いているよ」というメッセージになります。もちろん、「それ、詳しく

く教えて」などと、話を広げてもらいましょう。大切なのは、特定の生徒にだけでなく、いろいろな生徒に声をかけることです。誰にでも分け隔てなく声をかける教師の姿を見て、生徒は「この先生と話してみたい」と思うのです。

西村客員准教授が監修した対話のヒント集

『生徒の自己理解を促す共感的な対話』

神奈川県立総合教育センターが製作した冊子『生徒の自己理解を促す共感的な対話』では、学校生活の様々な場面において、教師が生徒と「共感的な対話」を実現できるように、具体的な対話のポイントを紹介している。

<https://www.pen-kanagawa.ed.jp/edu-ctr/sodan/leaflet.html>



教師ばかりが話す面談から 生徒自身が語る面談へ

「面談では、生徒の話を書くつもりだったのに、ふと気がつくと、自分ばかりが一方的に話していることがよくある」など、面談の理想と現実で悩む教師は少なくない。西村客員准教授は、教師ばかりが話をしてしまう場合は、生徒の話を書くことよりも、教師が自分の考えを伝えることを優先していることが多いと説明する。教師の解釈を前面に出すと、生徒は教師に対して話すことを諦めてしまう。「生徒一人ひとりが、自分とは違う存在であるという前提に立って、生徒の言葉に耳を傾けることが大切です」(西村客員准教授)

- 「今のあなたはこうだ」「こうあるべきだ」などと、教師の解釈を生徒に押しつけていないか？
→生徒自身に現状認識と今後どうしたいのかを語らせる
- ほかの生徒や教師自身の成功体験を一方向的に披露していないか？
→生徒が「先輩はどうしていたのですか？」などと聞いてきた場合は答える

2

面談での 接し方

人生の物語の語り手である 生徒を尊重する

生徒が自分の興味・関心や将来の目標などを整理し、歩むべき進路を明確にしていくために、教師は面談で生徒にどのように接するとよいのでしょうか。

面談で生徒の話を書いていくとい「それなら○○をした方がよい」な

どと具体的な助言をしたくなるものです。しかし、性急に解決策を示すのではなく、生徒の考えや悩みに関心を持って耳を傾け、「あなたはどうしたい？」などと問いかけ、生徒自身に状況や思いを整理させることが大切です。生徒が稚拙な考えを語ったとしても、「あなたはそう思ったんだね」、「あなたを感じたことは分かったよ」といったように、生徒の思いや考えを受け止め、「じゃあ1週間後に、また先生に状況を教えてね」などと、一緒に考え続ける姿勢を示します。

面談に臨む教師にまず求められることは、生徒を人生の物語の語り手・創り手として尊重すること、そして今後どうしていきたいのか、生徒自身の考えを聞くことなのです。

面談に臨む教師にまず求められることは、生徒を人生の物語の語り手・創り手として尊重すること、そして今後どうしていきたいのか、生徒自身の考えを聞くことなのです。

言葉を引き出すことで、 生徒は自分を語る力を得る

とはいえ、生徒の話に「うんうん、そうなんだね」と聞くことだけが共感的な対話ではありません。生徒の話の中で気になったことや分からないことは質問してもよいですし、生徒から問われたら、先生自身の考えを伝えてもよいでしょう。その際は、生徒の考えを受け止めることが大切であり、否定してはいけません。そして、「この生徒は、なぜそう思ったのだろう」と、生徒に関心を持ってさらに話を聞きます。面談の途中で内容を整理することも教師の大切な役割です。その際、「まとめると、こういうことだね」と決めるのではなく、「これまでこのことを整理すると、先生はこう理解したのだけど、それでいいかな？」と、生徒に必ず質問するようにします。もし整理の仕方が違っている場合は、生徒は「ここが違います」と指摘することになり、生徒にとって自分の考えを再確認するチャンスとなります。

性急に答えを与えるのではなく、生徒の言葉を待ち、受け止め、引き出すことで、生徒は少しずつ自分を語る力を身につけていきます。



面談力を高める お勧めアクション

逐語録を共有し、 面談を振り返る

面談が上手な先生は必ずどの学校にもいます。面談のスキルを高めるには、そうした先生の、生徒との面談に同席するのが一番です。面談に同席させてもらうことが難しければ、面談でのやり取りを逐語録としてそのまま書き起こしてもらい、それを読んでみるとよいでしょう。同じように、自分の面談を逐語録で振り返ることもお勧めします。自分では傾聴・受容しているつもりだったのに、「○○しないと駄目だよ。そのためにはまず○○から始めて……」などと、自分が答えを提示している時間が多かったと気づくことも少なくないものです。ぜひ、取り組んでみてください。

専門家でもこんなことが……

共感的な対話は意外と難しいものです。私たち専門家でも、逐語録で面談を振り返ると、相手に対して「ここができていませんね」「こうすればよいのですが」といった言い方になっていることがあります。共感的な対話の学問的な意義も理解しているから大丈夫と思わないで、お互いに研鑽を積みみたいですね。

年内入試支援

— 引き出し、共に創る「マイ・ストーリー」

3

事例から考える

「その夢は無理」ではなく、
「なぜ、それが夢か」を聞く

自分の適性や学力などとギャップがある志望を語る生徒には、どのように接すればよいか考えてみましょう。

「このままのあなたでは無理だよ」などと否定してしまつと、その後、生徒は自分の考えを話さなくなつてしまつて恐れがあります。かと言って、「いいね、頑張つて！」と励ますだけではよいというものでもありません。

最初に耳を傾けるべきことは、生徒がそうした志望に至つた理由です。「人の命を救いたいから」など、生徒が語つた志望理由をまずは受け止めます。「命を救う」といった、進路を考へる上で大切にしたい思いを生徒と共有することで、志望変更することになつた場合も、「命を救う仕事は、ほかにもあるのではないか」などと、ほかの選択肢を生徒と探ることができるようになります。

越えるべき現実社会の壁を一緒に確認する

ただし、ほかの選択肢を探し始めるかどうかは、生徒が決断することです。教師が「別の道を探したら？」と志望の変更を勧めてしまつと、生徒にとつて、教師が進路の障壁となつてしまいます。現実として越えなければいけない壁の高さを生徒自身に自覚させ、決断をさせることが重要なのです。

そこで、志望をかなえるためには何をしなければならぬのかを生徒に調べさせ、一緒に確認していきまふ。生徒が壁を越えるための努力を始めるのであればそれを支援し、志望変更を検討したいと考えたのなら、進路を考へる上で大切にしたい思いを生徒と確認しながら、「あなたにふさわしい進路はきっと見つかるよ」と、生徒を応援します。

生徒から進路について調べたことを聞く際には、生徒と同じタイミングで気づきを得たように振る舞います。「先生が言った通り、難関の試験だったでしょう」ではなく、「そうか、そんなに難しい試験なんだね」といった言葉の方が、相手の自尊感情を損ねないというの、大人も同じなのではないでしょうか。

4

対話を通じた生徒の成長

生徒自身が思いを
再構築できるようになる

生徒との面談などで話題に上がるテーマは、簡単には答えが出ないものばかりです。生徒は端的な正解を求めがちですが、答えは1つではなく、解釈や選択肢が複数存在することを生徒に理解させることが大切です。そして、面談などで「こうしてみよう」と具体的に策が決まっても、よい意味での「とりあえず」の策であり、「うまくいかなかった時は、あなたが悪いわけではない。別の方法をまた一緒に考えよう」と、再考するチャンスがあることも伝えます。そうしたかわかりを続けるうちに、生徒は「ここが疑問だったけれど、こういうふうになってみようと思います」などと、自分の考えを整理・再構築することができるようになります。教師との対話を通して、生徒は自分を語る力を確実に身につけていくのです。

次号から、大きく変化する大学入試環境で求められる「新進路選択」についての連載がスタート!

年内入試の募集枠の拡大など、大学入試環境が大きく変化する中で、これからの生徒の進路選択には、どのような支援が必要になるのか。10月号から、その考え方と実践事例を紹介するコーナーの連載をスタートさせます。ご期待ください!

▶ 年内入試の支援に役立つ! 記事のご紹介

『VIEW next』高校版では、教師が生徒理解を深めるための志望校検討会のあり方や、生徒の長所を伝える推薦書の事例、資質・能力の育成を意識したポートフォリオのフォーマットなど、年内入試に役立つ記事をこれまでご紹介してまいりました。それらの記事をまとめたページを、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』内につくりました。ぜひ、ご覧ください。

<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article16467/>

